

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	22-063	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>		
The Influence of Alcohol Consumption, Depressive Symptoms and Sleep Duration on Cognition: Results from the China Health and Retirement Longitudinal Study アルコール摂取、うつ症状、睡眠時間が認知に及ぼす影響：中国の健康と退職に関する縦断研究の結果より		
<b>執筆者</b>		
Tianyue Guan, Chao Zhang, Xuanmin Zou, et al.		
<b>掲載誌</b>		
Int J Environ Res Public Health. 2022 Oct 1;19(19):12574.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
全国調査、飲酒、抑うつ症状、睡眠時間		36231874
<b>要旨</b>		
<p><b>目的：</b>認知機能と関連する要因には、飲酒、うつ症状、睡眠時間が含まれるが、これら要因の相互関係についてはあまり知られていない。そこで、本研究でこれらの関連について検討した。</p> <p><b>方法：</b>中国健康退職縦断研究 (CHARLS) コホートのベースラインデータ (2011年) と 2018年のデータを使用して横断的および縦断的検討を行った。CHARLSは、28省の450の村と150の郡を対象とする全国的な調査プログラムで、包括的な人口統計情報を有している。CHARLSコホート参加者のうち15,414人を本研究の対象とし、以下の8群に分類した。すなわち、飲酒量により①非飲酒者、②月1回以上の飲酒、③月1回未満の飲酒、うつ症状により④非うつ状態、⑤うつ状態、睡眠時間により⑥6時間以下、⑦7-8時間、⑧9時間以上と分類した。認知機能は、記憶力、見当識能力、および実行機能を評価し、合計認知スコアを算出した。</p> <p><b>結果：</b>横断的分析において、非飲酒者に比べ、月1回以上の飲酒者で認知機能スコアは高かった。一方、うつ状態の群、睡眠が6時間以下の群で記憶力、実行および全般的認知スコアは明らかに低かった。認知機能に対する飲酒の影響は、主にもうつ症状を引き起こすことによって媒介されるが、飲酒と全体的な認知機能との間には直接の相関関係は無かった。睡眠時間はうつ症状と認知機能との関係に影響を与える調節因子であることが判明した。さらに、飲酒、うつ症状、睡眠時間の間には、認知機能の低下に対する相互作用があった。また、認知機能は加齢とともに顕著な低下傾向を示した。</p> <p><b>結論：</b>うつ症状は主に飲酒と認知機能との関係を媒介し、この媒介効果は睡眠時間によって変化した。うつ病の症状を軽減し、睡眠時間を調整することにより、アルコール政策の策定や認知機能低下の予防につながる可能性がある。</p>		